

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19530594  
 研究課題名 (和文) アタッチメント次元とコンパニオンシップ次元の発達の影響関係の探究  
 研究課題名 (英文) A Longitudinal Study on Developmental Inter-relationships between  
 Mother-Infant Companionship and Attachment

## 研究代表者

中野 茂 (NAKANO SHIGERU)  
 北海道医療大学・心理科学部・教授  
 研究者番号：90183516

研究成果の概要 (和文)：「care-attachment」と「intersubjectivity-companionship」という二つの社会的次元はどちらも 乳児期の対人関係、とりわけ発達初期の親子関係の基本概念であるが、両者の関係は知られていない。乳児期には親から安心感を得ると同時に、親とこと、相互の意図に合わせて行為を調整し、協力し合う力の発達が必要である。そこで、本研究では、29 組の母子を対象として出生直後から 3 歳まで、以下の指標について縦断的に観察した母親は、3, 4 か月時に、遊戯性を、3, 6 か月時に Ainsworth の感受性を評価された乳児は 4 か月時に PIS、6 か月時に物志向性と注意の共有、10 か月時に SIS を評価した。パス解析の結果、①PIS と SIS とは関係がないこと、②母親の遊戯性が intersubjectivity の発達に大きな影響力を持つこと、③母親の感受性は inter-subjectivity とは独立なことが見出された。従って、乳児期の対人関係の発達過程には、「care-attachment」と「intersubjectivity-companionship」という二つの独立した文脈のあることが示唆された。

研究成果の概要 (英文)： This longitudinal study examined developmental processes of infant intersubjectivity and their relations to maternal playfulness and maternal sensitivity. Both attachment and intersubjectivity are assumed a behavioral propensity towards interpersonal connectivity and sharing mental states with others. However, little is known about whether they have any relationship or not. 29 mother-infant dyads participated in this longitudinal study. Mothers were evaluated; playfulness at 3 and 4 months, the Ainsworth scale of sensitivity at 3 and 6 months. Infants were measured; sensitivity to social contingency at 4 months, object orientation and sharing attention at 6 months and levels of secondary intersubjectivity at 10 months. A path-analysis revealed that the primary and the secondary intersubjectivity are not related, and that maternal playfulness consistently guides development of infant intersubjectivity, but maternal sensitivity have no relation to it.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：intersubjectivity、companionship、attachment、乳児、縦断研究、文脈、発達

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの研究では乳児期の対人関係の発達の中核概念である「care-attachment」と「intersubjectivity-companionship」という二つの社会的次元について、別々に研究され、乳児の発達過程上でどのような相互影響関係にあるかという点は検討されないままとなっている。また、intersubjectivityの発達は、Trevarthenによって、2者関係の第一次(PIS)から三項関係の第二次(SIS)へと9か月頃に移行することが論じられているが、その発達過程は実証的に検証されていない。そこで、本プロジェクトは、それら二つの対人関係システム間の相互影響過程の発達の变化を検討した。

## 2. 研究の目的

(1)アタッチメントと親子の縦・横の関係: 対人関係を大きく分けると、縦と横の関係に見なせる。発達心理学では、伝統的に、縦の親子関係、横のピア関係に分けられてきた。しかも、アタッチメント理論に認められるように、乳児決定論によって、ピア関係を含むあらゆる面の決定性を親子関係に与えると同時に親の役割をアタッチメント対象に固定するとともに、横の関係は幼児期以降のピア関係に限定をして扱われてきた。しかし、最近、親はアタッチメント対象であるばかりではなく、教師、遊び相手など多面的な役割を担っている、アタッチメントシステムは危険で活性化するのだから遊びのような安全な場面にまで敷衍することは理論的に誤りである、乳児期のアタッチメントの質が後の行動に影響するのは「all good things go together」にすぎないなどの主張などが出されつつある。とりわけ、最近の動きとして、アタッチメント関係の影響範囲を特定の領域、すなわち、心身の危険・脅威への不安やその克服と安全などに限定をすべきだと主張されつつある。Grossmann, Grossmann, & Zimmermann (1999)は、我々の行動を危険な状況でアタッチメント対象に接近する傾向(propensity)と、安全な状況でアタッチメント行動を低減させて遊びや探索に従事する傾向に分けて論じている。Macdonald (1992)は、アタッチメントと「暖かさ(warmth)」とは、それぞれnegativeな情動、positiveな情動とを下敷きにした生物学的に異なる行動システムであると論じている。つまり、アタッチメントは恐怖からの保護と関わる情動-動機システムであり、親密さのようなpositiveな情動-動機システムからは区別されなければならないという。Bowlbyも

またアタッチメントの機能について、元々、「捕食者からの保護」を想定していた(近藤, 2001)という。実際、乳児期のアタッチメントがStrange Situation Procedureという未知の状況での母子分離によって子どもから緩やかな不安・ストレスを誘発するような負荷をかけたnegativeな状況で測定されることを考えれば、このことは理論的には当然といえよう。むしろ、このようなストレスフルな状況で測られたアタッチメントの質の違いが、なぜ遊びという楽しい状況が大半であるピア関係に影響を及ぼすと主張できるのかの方が不思議に思われる。アタッチメント研究者であるWaters, Corcoran, & Anafarta (2005)は、元々、アタッチメントは親密な関係だけを対象としてきたはずなのに、明確な説明理論を欠いたまま、「all good things go together」としてsecureなアタッチメントが他の領域と関係を持っているかのように拡大をしてきたことを認め、その好例として仲間関係への影響を挙げている。つまり、望ましい親子関係と望ましいピア関係とが併存した全体的に望ましい発達状況にある子どもは珍しくはないのであり、両者の相関が認められたとしても、それが先行条件として使われてきたアタッチメントの結果であるかどうかは、事実を反映していない可能性があることに留意すべきだというのである。したがって、仮にアタッチメントがピア関係に影響を及ぼすとすれば、それはどのような文脈の場合かを明らかにすることが必要であり、両者の影響関係を明確化することができるのではないかと考えられる。少なくとも、親子アタッチメント関係の全体がピア関係の全体と相関をしているというのではなく、前者が後者の文脈である遊び、協力、友情、競争、恋愛などの特徴のいずれと関係を見いだせるかを明らかにすることではないだろうか。つまり、Macdonald (1998)が主張したように、人間の行動は複合的な動機システム(discrete human motivational systems)から成り立っていること、それが特定の文脈において影響力を持つことを明らかにすることになるのではないだろうか。

(2)親子関係の多面性: これまでの研究の多くでは、親子関係での親の役割を養護性に限定した見方がとられてきたが、文脈による行動、役割の違いを考慮に入れることで、親は多重の役割を担っているという事実が再発見されるだろう。たとえば、親が子どもの遊び相手になることは日常では珍しくないこ

とであるだけではなく、親子遊びが子どもの発達に重要であることは多々言われてきた (Fromberg & Bergen, 1998; MacDonald, 1993)。とりわけ乳児期では、くすぐりやコミカルな発声や“いないいないばあ”などのゲーム様の親との遊びは、「思考の揺籃」 (Hobson, 2002)として重視されてきた。しかも、親は、子どもと一緒に学ぶことを楽しむプレイメイトである (Nakano, 1998, 2001; Reddy, 2001)。同時に、遊びのエキスパートとしての足場を提供している (Fromberg & Bergen, 1998)。

同時に、親は文脈によって教師、遊び相手、安全基地を演じ、また、子どもと同じ視点に立ちつつ、同時に、大人としての視点を維持するような多重の視点 (multiple perspectives) で子どもと関わっていることも報告されている (Maccoby, 1992)。

したがって、アタッチメントは子どもの発達を生み出し、方向づけている全体的な社会的システムではあっても、その全体の一部 (Levitt, 2005)だと考えられる。また、親の役割をこのような多面的な視点、とりわけ遊び相手としてとらえることは、親子関係が従来の研究で信じられてきたような縦の関係に限定されるのではなく、いわば横の関係も含んでいることを示唆する。

問題は、このような親子のプレイフルなやりとりとアタッチメントとは同じ親子関係の中でいかに関連しているのかである。また、それぞれがピアーとの関係とどのような影響関係を持っているのかである。親の役割の多面性が指摘されたのは決して、最近のことではない (Crittenden, 1988; Maccoby, 1992)。それにもかかわらず、このような親子関係の多面的関係の側面が相互に影響し合っているのかそれぞれ独立した関係を構成しているのかが検討されないまま等閑視されてきた (Grossmann & Grossmann, 2000)。Thompson (2005)が強調しているように、多重な関係にあるものは多重なものとしてとらえるということが、追求されなければならないことは明らかである。

(3) Intersubjectivity と companionship: 親の役割には、危険—安全という negative な次元でのアタッチメント保護と同時に、親しさや遊びなどの positive な次元が多面性が含まれている。このことは、親は子どもと関わっている時には、主に共同性・同等性 (companionship) を感じている (Harach & Kuczynski, 2005)、幼い幼児でも自分と相手との主観的な年齢差の判断から、相手に求める行動を依存的な行動・態度と対等な行動・態度を区別して、場面ごとに使い分ける (Edwards, 1998)、などの知見から示唆される。この視点に立てば、従来の研究で踏襲さ

れてきた親子関係を縦、仲間関係を横とする固定した見方は事実を反映していないことになる。つまり、私たちの他者との関係は、大人であっても、子どもであっても、いわゆる縦の関係も横の関係も含まれていると推察される。つまり、私たちの行動は、このように文脈依存的でかつ可塑的といえる。

Trevarthen (1998, 2001) は、子どもは親に保護ではなく、仲間 (companion) としての同型的な関わり、すなわちコンパニオンシップを求める生得的な動機 (motive) を持って生まれてくるのであり、アタッチメントは保護や世話などの養護的な (nurturant) 行動の範囲に限定された関係に過ぎない (Trevarthen, 2006) と論じている。つまり、secure なアタッチメントだけが乳児の社会情動的な動機に應えるものではなく、出生直後から親子関係を成り立たせ、展開されているのはコンパニオンシップであるという。

従って、アタッチメントだけではなく、コンパニオンシップを含めた新しい統合的な視点が求められているのである。Trevarthen (2006) は、私たちの行動はその時々々の動機の違いによってコンパニオンシップ、アタッチメント、そして認知活動という異なったシステムが有機的に生起するかを論じ、そのようなプロセスを「アタッチメントの環 (the circle of attachments)」として提唱している。このような多重かつ有機的な関係性の発達システムの視点に立つことで、全体的な発達象を描けるようになるのではないかと考えられる。

しかしながら、Hobson et al. (2004) は母親の感受性が SIS と関連することを示しているが、一方で Nakano 他 (2007) は、少なくとも母親の感受性は PIS とは関係ないと論じている。Tomasello ら (in press) は attachment はサルで認められるが、Intersubjectivity は認められないことから、別物であることを示唆している。

さらに、Trevarthen は、PIS から SIS への発達過程について、実証的なデータを示していない (Trevarthen, 1979; Trevarthen & Hubley, 1978)。彼の記述では、9~10 か月頃に、その直前のものへの強い興味から SIS が“突然”出現するという。

そこで、本研究は、この点も含めて「care — attachment」と「intersubjectivity — companionship」という二つの社会的次元の関係性について検討をした。

### 3. 研究の方法

①参加者：妊娠中のカップル対象のマタニティスクールで子どもが誕生後にプロジェクトに参加してくれるようにという募集に応じた、43人の協力者。そのうち子どもの月齢3、4、6、10か月の全測定に参加して

くれた 29 組の母子をここでの分析データとして用いた。

②測定尺度：

1) 3か月：母親のやりとりスタイルの測定：遊戯性、感受性、指示性、情動性、仲間性、養護性について5段階で評定し、因子分析を実施。その結果、“playful companion”と“sensitive support”のやりとりスタイルが見出されたので、それぞれについて得点化

2) 4か月：乳児のPIS測定、母親の遊戯性測定：Murray and Trevarthen (1985)のダブルビデオ法でPISを測定。同時に母親の遊戯的働きかけ頻度を測定(詳細は Nakano et al. (2007)参照)

3) 6か月：実験者が家庭訪問し、10分間の自由遊びを録画～母親の感受性(Ainsworth et al., 1978)と乳児の物志向性(自由遊び中の自発的な物への接近)を測定

4) 10か月：Hobson et al. (2004)を修正した「E-TRIAL」法で乳児のSISを測定：乳児が、1)物の永続性課題、2)道具課題、3)回り道課題、4)模倣課題、5)協力課題、6)共同注視課題での成功・失敗経験を実験者とどれほど共有しようとするかで評定

4. 研究成果

①各月齢での変数間の相関関係

Table-1. Spearman's rank order correlations between infant's and mother's measures in each month (N=29).

		3 months		4 months		6 months		
		PC	SS	IC	MP	OO	AS	MS
3 months	Playful companion (PC)	--						
	Sensitive support (SS)	0.26	--					
4 months	Infant sensitivity to inter-personal contingency (IC)	0.36 <sup>†</sup>	0.10	--				
	Mother's playfulness (MP)	0.54 <sup>***</sup>	0.28	0.38 <sup>†</sup>	--			
6 months	Infant's object orientation (OO)	-0.02	0.20	-0.10	0.15	--		
	Successful attention sharing (AS)	-0.02	0.21	-0.15	0.01	0.23	--	
	Maternal sensitivity (MS)	0.07	0.49 <sup>**</sup>	0.18	0.00	0.30	0.32	--
10 months	Infant triadic engagement (TE)	0.36 <sup>†</sup>	0.26	0.24	0.30	0.06	0.38 <sup>†</sup>	0.10

<sup>\*\*\*</sup>p<0.001. <sup>\*\*</sup>p<0.01. <sup>†</sup>p<0.05.

有意な相関関係は、

- ・母親の3か月の遊戯性と乳児の4か月でのPISおよび10か月でのSIS
- ・母親の3か月の感受性と6か月の感受性
- ・乳児の6か月での注意の共有と10か月でのSIS

\*しかし、母親の感受性はPIS、SISのどちらも関係性が認められなかった。

\*PISとSISは関係性が認められなかった。

以上から、intersubjectivityとアタッチメントとは異なる親子関係のシステムにあるのではないかと考えられる。また、2者関係(PIS)と3者関係(SIS)は発達的に異なる起源を持っているようだと考えられる。

②各月齢での変数間のパス解析

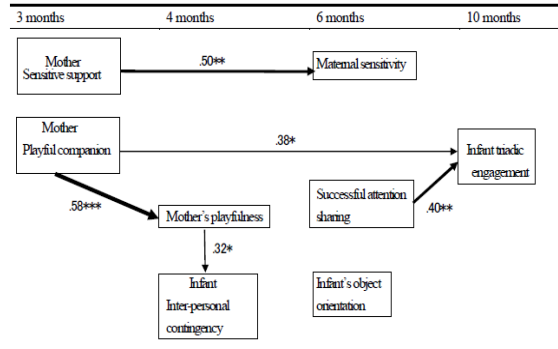


Figure-3. Significant developmental passes predicted from Pass Analysis of infant's intersubjective behaviours and maternal interaction propensities. <sup>\*\*</sup>p<0.001. <sup>\*</sup>p<0.01. <sup>†</sup>p<0.05.

各月齢間での変数間の有意なパスは、上の結果と同様に

- ・母親の3か月の遊戯性と乳児の4か月でのPISおよび10か月でのSIS
- ・母親の3か月の感受性と6か月の感受性
- ・乳児の6か月での注意の共有と10か月でのSIS

したがって、この結果からも

intersubjectivityとアタッチメントとは異なる親子関係のシステムであり、前者は、親の遊戯性と関連したシステムといえる。さらに、2者関係(PIS)と3者関係(SIS)は発達的に異なる起源を持ち、後者は、子どもが注意を共有しようという共同注意の出現と関連しているようである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

- ① Shigeru Nakano, Kiyomi Kondo-Ikemura, & Emiko Kusanagi.

The Double Perturbation of Japanese Mother-Infant Habitual Interactions by the Double Video Paradigm and Significance of Playful Interactions. 査読有, Infant Behavior and Development, 30-2, 2007, 213-231.

- ② 中野 茂, 静的インターサブジェクティビティから動的インターサブジェクティビティへ：インターサブジェクティビティの発達過程の再検討, 査読有, 北海道医療大学心理科学部研究紀要 3, 2008, 25-65.

- ③ 中野 茂, 阿部千晶, 親子関係における情動的反発性の意味, 乳幼児医学・心理学研究, 査読有, 18, 2010, 85-102.

[学会発表] (計 9 件)

- ① 中野 茂, 関根恵, 近藤清美, 乳児の Intersubjectivity と Attachment の発達に及ぼす母親のやりとりスタイルの同質性・異質性の縦断的検討, 日本発達心理学会, 2008 年 3 月 22 日, 大阪国際会議場
- ② 中野 茂, 関根 恵, 0 歳児のインタースブジェクティビティの発達プロセスの再検討, 日本心理学会 72 回大会, 2008 年 9 月 21 日, 札幌市 (北海道大学)
- ③ 中野 茂 (企画・発表者), シンポジウム: 社会情動発達過程への交差文脈的アプローチを目指して, 日本心理学会 72 回大会, 2008 年 9 月 21 日, 札幌市 (北海道大学)
- ④ 阿部千晶, 中野 茂, 嫉妬の起源に関する探索的研究～一事例からの検討～, 日本心理学会 72 回大会, 2008 年 9 月 21 日, 札幌市 (北海道大学)
- ⑤ 草薙恵美子, 中野 茂, The structure, stability and age trends of temperament in a Japanese sample, XX IV International Congress of Psychology, 24th July 2008 Berlin, Germany
- ⑥ 阿部千晶, 中野 茂, 嫉妬の起源を探る: 発達初期の乳児は、母親の愛情が他者に向いたときにどう反応するか, 日本発達心理学会, 2009 年 3 月 23 日, 東京都目白区 (日本女子大学)
- ⑦ 野呂衣美, 中野 茂, 母親の対乳児動作のタイプとその発達的变化に関する一考察, 日本発達心理学会, 2009 年 3 月 23 日, 東京都目白区 (日本女子大学)

- ⑧ Shigeru Nakano, Developmental Changes in Maternal Motionese towards Infants in the Earlier Half of the First-Year. XIVth European Conference on Developmental Psychology, 2009 年 8 月 20 日, Vilnius, Lithuania
- ⑨ Shigeru Nakano, A Relationship Between Mother-Infant Intersubjectivity in Infancy and Their Collaborative Interaction at Age Three. XVIIth Biennial International Conference on Infant Studies, 2010 年 3 月 13 日, Baltimore, Maryland, USA.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

中野 茂 (NAKANO SHIGERU)  
北海道医療大学・心理科学部・教授  
研究者番号: 90183516

##### (2) 研究分担者

池邨 清美 (IKEMURA-KONDO KIYOMI)  
北海道医療大学・心理科学部・教授  
研究者番号: 80201911

草薙恵美子 (KUSANAGI EMIOKO)  
國學院短期大学・幼児児童教育学科・教授  
研究者番号: 90341718